
my way

優女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

my way

【Zコード】

Z2199BA

【作者名】

優女

【あらすじ】

万事屋三人がタイムスリップ！！その場所は…？
銀時たちがそこで見たものとは…？

第1話　自分史は大事でしょ（前書き）

万事屋「冠連載小説です。あ、銀さんが「KAMUI終わった」って嘘言つてますけどほりつておいてください

第1話　自分史は大事でしょ

万事屋。

説明は特にいらないよね、皆さん知つての通りですから。

いつもと同じ朝。

小鳥のさえずりが澄んだ空気に馴染んで優しく聞こえる。

「ふあああ～」

寝巻きの万事屋オーナー、坂田銀時が欠伸をしながら居間へ出てきた。

今日はいつもより少し早く目覚めた。

気持ちのいい朝、と素直に感じた。

「あけましておめでとうございます、って何言つてんだ。とっくに明けてるつづつの。KAMICOも終わつてやつと新しい万事屋[冠連載]もらつたのになんだよこの登場。地味にも程があるつづつの。しかもあるあるネタでよ、できあがつてんだよ。結末は！」

と、一人ブツブツ愚痴を言つてると神楽も居間へ入ってきた。

「朝から一人で何言つてるアルか。恥ずかしいつたらあいつやしない
…」

目を擦る。いかにも眠たそうな態度。

「せーなア。たまには仕事の愚痴を言いたいもんだ」

「仕事の愚痴は家に持ち帰るもんじゃないネー」

「ハイハイ」と軽く流す銀時。

「もうすぐ新ハが来る頃だな」

「//タさんみたいに時間ちよつきしで来るアルか」

「セコ二まできつちりしゃねーから」

そう言つてると扉が開く音がした。

「噂をすればアル」

新ハが来たのは確かだが、なかなか入つてこない。//シシシと床が
軋む音が響く。

やっと居間の戸が開いた。

「おはようございます。銀さん、玄関にこんなものが

ドカッと置いたそれは電子レンジのような機械だった。

「家のレンジはまだ壊れてねーけど。つーか誰だうちに粗大ゴミ置いたのは!」

怒る銀時の傍ら、神楽は不思議そうに機械を見つめる。

「私の部屋には置けないアルからな。新八の家に持つてつたら?..」

「いや、うちに置いたら姉上がすぐに壊しちゃうから

困る二人。机に置かれた謎の機械。

しばらく眺めるだけになる。

「動くのかア?」

銀時が機械のふたに手をかけた。

「銀ちゃん!一応冷や飯持ってきたアル

「オイオイ、まだモノホンの電子レンジって決まったわけじゃねーつて

「それじゃあこの機械は一体…」

銀時はとつてを握った。
そして開けた。

三人は中を覗いた。

「なんだ、ただの電子レンジじゃないですか」

「エエラセんなヨ」

「ありきたりなレンジだなあ」

アハハと談笑する二人。

「…アレ、神楽。お前いつの間に着替えた?」

「そういう銀ちゃんじゃ、わたくしの寝巻をせびうしたネ」

お互に自分の服装を見る。いつもの着流し姿。靴も履いている。

「アハハ、こりやアレだ、叙述トリックだ。文面ならではの特権だ
よ

「凄いアルな」

「なわけあるかアアア！－！」

新八のシャウト。

「周りを見ろ……そこまで僕ら万事屋にいましたよね！？なんでいきなり草原！？」

「すげーなオイ！叙述トリックも進化したもんだ。これでどこのでも行きたい放題だア」

「そつアル！所詮、読者に伝わらない限り自由自在ネ！…」

「そんな読者に分かりづらい小説なんてすぐに打ち切りだアアアア！分かれよー！お前らがいの一番に状況を把握しろよー！」

新八の説教が続く。

「わーったよ。分かるよ、俺だって大人だもの」

「さすが銀ちゃん大人ネ！！冷静沈着は身に付いてるもんアル」

「ここ」でやつと落ち着いた三人。

やつぱり周りは草原。この広い草原に三人と謎の機械だけがいる。

「…どうじょ、どうやつたら戻るんだー？つーかこの機械のせいだよなーどこでもドアならぬどこでも電子レンジかよー！」

銀時は機械を持ち上げた。が、とたんに機械は崩れ落ちた。破片がむなしくバラバラと地に落ちて砕ける。

「「「……」」

「ふう、処分は終わった。よし、けーるぞ」

「けーるぞじやねーだろコレホエエ...元壁に帰れなくなっちゃつたよーー！」

「俺が悪いってのか！？俺か！？ああ責めるだけ責めればいいじゃねーか！..俺ア悪くねーからなーー！」

「いや、誰も銀さんが悪いなんて言つてませんよー。」

「持ち上げたら崩れ落ちた、それだけのことアル」

なんとか一人に慰められた銀時。

しかし一体ここはどこなのかまったく皆田見当がつかない。

三人は突然の出来事に戸惑いながらも、とりあえず歩くことにした。
歩けば誰か人に会えるかもしれない。

「...道だ！」

新八が指を指す。

田舎の田んぼの畦道のようだった。

「(イ)を歩けばどつかに辿り着くネ」

だが、銀時の様子が少し変だった。

この道、(イ)の風景...

「どうしたんですか、銀さん」

「いや……」

かぶりを振った。

いやまさか、こんなはずがない。

向こうの方から、誰かの足音がした。

走る足音。

子供たちが向こうから走つて来るのが見える。その中に一人、長身の大人がいる。

「やつた、人アル！」

新八と神楽もそつちに駆けて行く。だが銀時だけは立ち止まつた。

そのシルエットは次第にはつきりと露になる。

「……嘘だろ？」

長身の人物の正体。

「しょ……松陽……先生」

第2話 1日は挨拶から

目の前にいるのは紛れもない、かつての恩師、松陽先生だ。

「世の中には似た人が三人いる。俺の場合は大泉洋と毛玉、ウン」

じゃあ目の前にいるのは？

「銀さん！ ありがたいことに家まで案内してくれるそうですよ！」

「よかつたアル！ これで飢え死には避けられるネ！ ！」

「あつ、そつか

言われるがままに、新ハと神楽に手を引っ張られる。

「こんにちは」

長身の人物は軽く会釈する。

「じつにちは」

「噛んでるし」

へつと笑う神楽。

「私、村塾を開いてます、吉田松陽といいます」

松陽と名乗る男は一コラと微笑んだ。

「え、あ、どうも」

モノホンなんん!?

「ちょ、ここのチビ、銀ちゃんにクリソッネ……生き別れの兄弟アルか!?」

神楽の横にいるのは周りの子供と同じくらいの背丈で、だいたい7歳くらいの銀髪で天パで死んだ魚のような目をした子供がいた。

「本当だ!銀さんこそっくりですね!…」

その少年は不思議なものでも見るよつて銀時を見つめる。ひきつた顔の銀時。

「こいつ…もしかして…」

銀時は新ハと神楽を強引に引っ張り、数メートル先まで下がった。

「ちょ、何するんですか!」

「お前ら、落ち着いて聞けよ。アレは紛れもねエ、俺だ」

「えええ!…!…」「

ついでに一人の口を抑える銀時。

「俺たちばかりじゃらタイムスリップしちまつたようだな。あの電子レンジで」

「なるほど、レンジでチンした末がこうこう」とアルか

「なんもうまくねーよ！お前らは別にいいかもしけねーが俺の場合、俺があそこにいるからバレねーようにしねーと」

「大丈夫ですって。あんなに可愛い子供時代の銀さんが大人になつたらこうなるなんて誰も思いませんよ」

「レンジでチンした末が今の銀ちゃんね」

「どういう意味だコノヤロー」

三人は素性がバレないよとにと確認し、再び松陽たちの前に戻つた。

「すみません、俺たち旅人でして、ここら辺のことは何もわからない紛いモンでして。ああ、こっちの眼鏡が新ハでこっちのチャイナが神楽。で　　」

「銀さん、でしう？」

「え？あつ、まあ、そうです」

松陽はそれ以上聞かなかつた。

「それじゃあ付いて来てください」

万事屋三人は松陽の後を歩いた。

* * * * *

しばらく歩くと村塾が現れた。
懐かしいな、と呟く銀時。

「さあどうぞ」

松陽の誘導で、三人は塾とは別の部屋に入った。銀時には見覚えがある部屋だった。思い出したくない記憶もある。

お茶を出した後、松陽も一服した。

「三人はどうから来たんですか？」

「かぶき町アル」

「へえ、そんな遠くから」

銀時はどうも落ち着かない様子。

「銀さんでしたよね

急に呼ばれてお茶を吹く銀時。

「汚いアルな」

「何動搖してんすか」

「ばつ、ちげーよ。巻き舌なんだよ俺ア」

「猫舌ね」

アハハと笑う四人。硬直していた空気が少し和んだ。

「で、なんでしたっけ」

「あなた、私の教え子にそっくりだなあつて

「だつ、誰にですか！」

またお茶を吹く銀時。

「先生、あつちで高杉君と坂田君が喧嘩してます

一人の生徒が松陽に報告した。

「すみません、ちょっと空けますね」

そう言うと松陽は部屋をあとにした。

「高杉つてあの鬼兵隊の高杉さんですよね」

「まあ……」

軽く頷く銀時。

「坂田君って銀ちゃんのことアルな。昔から仲悪いアルか」

「せーな

頭を搔ぐ。

「とにかく早くもとの時代に戻る方法を考えねーと」

「IJの際銀さんの子供時代を堪能するのも悪くないですね」

「子銀ちゃんなら可愛いアルからな」

「ヤツと向やら企む一人。

「お待たせしました」

襖が開き、松陽が入ってきた。

「喧嘩、大丈夫ですか？」

「ええ、一人ともしようもないことで喧嘩していくて。笑っちゃう話、
みかんを取り合っていたんです」

「「ぶつ」」

銀時の顔を見るなり急に笑いだす新八と神楽。

「なんだよ

照れ隠しする銀時。

「みかんの取り合いでって、可愛いことしてたアルな」

ぐごごいと腕で銀時をつつく神楽。

「まあまあ神楽ちゃん。銀さんにもひつひつ時代があるんだよ」

小声で話す一人。

なんだかハブにされている銀時は茶をすすつた。

「結果、どうなったんですか？」

新八は尋ねる。

「もちろん、半分」です。でもまだ一人はそっぽ向いたままでけ
ど」

「強情なことは今でも変わらないアルな」

ふふふと小瀬に笑う。

「すんません、廁借りてもいいですか？」

「はい、どうぞ」

銀時は立ち上がり、襖を開けて部屋から出でていつとした。

「あの、場所分かります？」

松陽は呼び止めた。

銀時はうつすら廁の場所を覚えていたが、ここでは不自然だ。

「あっ、どこですか？」

ヤベツと思い、足を止めた。

「突き当たりを右に」

松陽は優しく笑うだけであった。

銀時がいなくなつたあと、松陽は新ハと神楽に話し出した。

「なんだか、彼を見ると安心しますね。不思議ですけど

「銀ちゃんアルか？まったく安心できないネ。万年金欠で家計は火の車ネ」

「給料も口クに払わないし、ちゃんとほらんだし。ホント銀さんに
は参っちゃいますよ」

一人は松陽がかつての銀時の恩師だということは知っていた。銀時
の親でもあるような松陽に、今の銀時を知つて欲しかったのだ。

「二人は彼の…部下なんですか？」

「部下っていうか、いつも一緒にいるんで。まあ家族みたいなもんです」

「貧乏家族アル」

「そうですか」

松陽は安堵したかのように笑った。

「やつぱり聞かなくても俺の記憶は正しかった」

廁を済ませ、部屋に戻る途中、銀時は足を止めた。

さつき高杉と喧嘩をしたという自分が、外の渡り廊下に座っていた。
銀時は子供の自分の横に座った。自分に話しかけるなんて可笑しい
と感じたが、何故かほうっておけなかつたのだ。

「…何してんだ、こんなところで」

「ほつとけよ」

「可愛くねー奴」

自分が相手は子供だ。何年も前のことだし、覚えてるはずもない。

「喧嘩したの、まだ根に持つてんのか。その気持ちよく分かるよ。
アイツにだけは負けたくねーって」

「…同じ髪」

突然、子銀時は銀時の頭を指差した。

「あっ、ああ。かわいそつだろ？天然パーマ。いつかストレートにしてやるって意気込んでるけど」

「…似合つてゐる」

思いもよらない言葉に口惑つ。

「アンタも似合つてゐば」

子銀時は笑つた。

「お前、名前は？」

「(笑)で坂田銀時です、なんて言つたら驚いてしまつ。

「俺は万事屋銀さんだ。頼めばなんでもしてやるよ」

「へえ

また子銀時は可笑しく笑った。

なんだか自分に笑われるなんて複雑…。と嬉しくも悲しくなった。

「…つーか、俺ってこんなに話す子だったつけ

子銀時を見つめる。

「おいチビ、お前もつと笑えよ?んでもつと先生のお手伝いもしく。勉強もして、いい大人になれよ」

「チビじゅねーよ。ちゃんと銀時つて名前あんだ

そつ言つと子銀時は他の子供たちがいる方へ駆けて行つた。

やれやれと一息つくと、銀時は部屋へ戻つた。

第3話 親心子知らず

部屋に戻ると松陽は笑つて迎えてくれた。あの頃と何も変わらないその笑顔。銀時は顔には出さなかつたが、無性に悲しくなつた。

本当のこと話をして、松陽に聞きたいことがたくさんあるのに、あの時言えなかつたことだつてたくさんあるのに、それが言えない状況に悔しさを感じた。だが、本当のことを言つたところで相手を混乱させるだけだ。信じてもらえるはずもない。

「遅かつたじゃないですか」

「ウン」

「文頭早々汚ねー」と言つた。戻る途中あのさつき喧嘩してた高杉君じやない方のガキと少し駄弁つてただけよ」

高杉君じやない方のガキって…。言い方に不満を感じたが言いにくくい訳もわかる。

「銀時ですか？」

松陽に聞かれ、ビクッとする銀時。

「ああ、確かにそう言つてたなア」

「お話をされたなんですか」

「まあ、軽く…ですけど。喧嘩はよくねーよ、潔く引き下がれって言つただけです」

松陽はクスッと笑つた。銀時は何かいけなかつたかと焦るが松陽の表情から迷惑だと感じなかつた。

「おもしろい人ですね、銀さんつて」

「え、そりっすか？」

「ダメアル。銀ちゃんすぐ浮かれるから、そんな讃め言葉言つたら天狗になるだけネ」

「いや、可笑しい人つてことかもよ」

「そりちか」

「オイオイ、そりゃねーだろ！ なあ先生！」

あつと思わず口を止める。松陽もいきなり銀時から先生と呼ばれ、戸惑つた。

「あつ、ねえ？ 吉田さん…」

「そうですね」

とつたに言い換える銀時。その場の空気は一変、また硬直してしま

つた。

「あ、 私次の授業があるので行きますね。 ゆっくりしていってください」

松陽は笑顔を見せると部屋をあとにした。

「よく笑う人アルな」

ハアッと羽根を伸ばすかのように背伸びする銀時。 やつと何かに解放された気持ちになつた。

「まつたく、いつも笑つてばっかで勘の鋭い先生だつたぜ」

「銀さん、『んなこと』いつのものアレですけど… ビウして吉田さんは今いないんですか？」

この世にはいないということは知つていた。 だが、どうして亡くなつたのかは聞かされていない。

「モーさなア…」

銀時は少し黙つたあと、また口を開いた。

「疲れたんじやねーの？」

「え…」

その意味がさっぱり分からなかつた。

「人生にアルか」

「そんなの知らねーよ」

銀時は机に肘をついた。

まさか、またあの人に会えるなんて。

言葉を交わすことができるなんて。

まるで夢みたいだ。

話したい伝えたいことができるいっぱいある。

なのに、言えない。

「ん? アレ...」

神楽が縁側の方を指差した。

「あつ……」

長髪を後ろに一つに結つてある少年が通った。

「ありや……ジラだ」

「ええええー!? 桂さん! ?あの、桂さんんんー?」

新八が絶句する。

「マジアルか！…賢そうに見えるネ…」

「あん時だけな。確かに成績良かつた気がすっけど」

「どう踏み間違えたら今のような桂さんになるんですか」

「謎の宇宙人飼つて古い考え方を持つとああなる。取説を読みすぎるタイプだな」

鼻をほじる銀時。

「なんですか、その例え…」

銀時と新八が話してゐる間、神楽は席を立つた。

「おいヅラあ、言つとくけどお前大きくなつたら口クな大人にならないね。電波バカとか呼ばれてるネ」

子供の桂は不思議そうに神楽を見る。

「何言つてんだバカ！鵜呑みにしたらどうすんだ…！」

バコンと頭を殴る銀時。

「なんですか。もうすぐ授業始まるので」

軽蔑の眼差しで銀時と神楽を見つめる。

「 「 …… 」 」

子供桂は一礼するとそのまま歩き出した。

「 おいイイイーーー立場逆転してんじゃんかーー何子供にバカにされ
てんだーーー 」

「 ビリすつ転んだら今のよいうなジラになんのか不思議でしょーがね
」

神楽も銀時に並んで頷く。

「 とにかく、これからビリしますか? 」 ここにいたって何も変わりま
せんよ 」

「 んな」と分かつてゐるよ。でも何も手がかりがねーんだ

銀時は再び畳に座つた。

「 迷惑なだけアルか

「 そーだろ 」

考え込む三人。

「壊れたあの機械、直せば元に戻れるのかも…。だってアレ、銀さんがふたを開けた瞬間タイムスリップしたんですから、またふたを開けたら戻れるんじゃないですか？」

なるほど、と腕組みをする。

「でも肝心な電子レンジがないね」

「最初にいたあの場所まで戻るのも無理だろ? な。方角だってあやふやなんだしよ」

「そんな…」

また沈黙が続く。

「ここにいたら松陽は戻つてくる。」

「ハア…」

銀時はため息をついた。

「わりい、お前らここにいる。すぐに戻つて来るから

「え、どう行くんですか?」

「いいから」

はぐりかすと銀時は部屋を出でいった。松陽と反対の廊下を歩く。

少し歩くと剣術を覚えるために使つた道場の入り口があつた。

「…懐かしいな」

銀時は一礼すると道場の中に入った。

綺麗に磨かれた床に、生徒たちが着用する胴着やら竹刀やらお面やらが綺麗に並んでいた。

袴には松陽が一つ一つ手縫いしてある名前の刺繡が施されている。その中に、”坂田銀時”と丁寧に縫われてある袴もあつた。その横には”高杉晋助”、”桂小太郎”の刺繡が入った袴が並ぶ。

「小せーな」

フツと小バカにしたよつに笑う。
誰もいない道場。

所々、思い出が詰まつてゐる。

あの頃の自分はこんな些細なことも、コレとして見よつともしないだ。

当たり前か、ガキだもの。

死ぬと分かっていたのなら、もつとたくさんじいじも「うえばよかつた。ご教授してもらえばよかったです…」あとになつて後悔ばかりが頭を過る。

「何してんの？」

その一言に体を向ける。そこには子供の銀時、桂、高杉の三人が立っていた。

「今から自主練の時間だから、どうでもらえますか」

桂の一言で正気に戻る銀時。

「あ、すまねーな」

三人は胴着を身に付け、竹刀を取る。

銀時は隅に寄り、三人の自主練とやらを見ることにした。

そーいや、三人でよくやったわ。と懐かしむ。

「んじゃ最初は銀時とジラからな。俺は審判する

「ジラじゃない桂だーちゃんと判定しろよ高杉」

「はい、それじゃ構えて」

銀時はそのなあなあなやり取りを見てられなくなり、高杉の横に来た。

「なつ、なんですか」

「まず根本的にお前ら二人とも竹刀の構え方が違う。もつとこう、脇を締めて」

銀時が竹刀を握る真似をすると、子銀時と桂もそれを見まねする。

「うし、それに竹刀上げすぎだ。もつと下に下ろせ。相手の顔が見えねーだろ？これじゃ相手がどんな表情かわかんねエ。相手の心を探るのも大切だぞ」

二人は言われた通り、竹刀を下げた。

「よし、構えて。始めっ！」

高杉の合図で始まった。

* * * * *

「少し休憩すつか」

なんだかんだ夢中になり、銀時も子供たちの相手をしてくたくただ

つた。

「あんた、松陽先生の知り合い？」

高杉が尋ねた。

「ん？ ああ、そんなところだ」

「名前は？」

「人に名前を聞くときはまず自分から名乗れってんだ」

「それ、松陽先生も言つてた。相手の人に失礼だつて」

桂が指摘する。

「高杉晋助です」

照れながらも名前を言つ高杉。今の高杉とは全然違いますきて銀時は思わず吹いてしまつた。

「なつなんだよー」

「いや、高杉君、ね。俺は万事屋銀さんだ。頼めばなんでもやる万事屋やつてんだ」

「銀時と名前似てるな」

だつて俺も銀時だものオオオ！…つて思わず突つ込みたくなるが抑

えた。

「桂小太郎です」

「ヅラ…じゃなくて桂君、ね」

「…もう面倒くさいから兄ちゃんでいい？」
あん

子銀時が聞いた。

「いいんじゃね？だつてなんか銀時に似てるし」

「それ俺も思った。この人本当に銀時のお兄さんじゃないのか？」

そう一人に言われ、何も言えなくなる銀時。

「違うでしょ。だって俺、こんなに間抜け面か？」

子銀時は銀時に指差す。

「んだとこのガキ！」

一緒になって、子供たちとワイワイする。剣も筋もまだまだだが、今に繋がる型はある。繋がらなくなってしまった部分が多くなってしまったが。

「やつぱりガキだな…」

そう呟く銀時。

「ガキと一緒になつて遊ぶ大人もどうかと思つけどね」

子銀時に聞かれたのだった。

「ガキはガキらしくしてればいいんだよ」

「コシンと一発、頭を叩いた。

「明日も練習付き合つてよ」

「お願いします」

「そう子供たちに言われた。

「明日か…」

銀時は三人を置いて背を向けた。

「考えとくよ」

「…もとの時代に帰れなかつたら。
俺は、一生ここにいるのか！？」

早く戻る方法を見つけねーと…

銀時ははや歩きで道場をあとにした。

第4話 携帯の充電つて気になる

「オイ、今までど」「に行つてたアルか」

「スグに戻つて来るつて言つてたじやないすか」

やはり部屋に戻るとまず怒られるのは予想していた。

「途中でコンタクト落としかりやつて」

「ウソつくなじやないよーー！」

誤魔化すにも新ハと神楽には通用しない。とつあえずザッとせつまでのこと話をした。

「…銀さんは、その三人を見てどう思つたんですか？今じゃ高杉さんにいたつては縁を切つたような感じなんですけど」

「別に何とも感じねーよ。ただ、懐かしかつた。そんだけのことだ」

言葉に詰まる新ハ。

「…にいつまでもいるわけにはいかない、むしろことはいいけないと感じた。

未来の人間が、過去を変えるなんて大層なことをしてはいけない。他人が口出しそるようなマネはダメだと銀時も思った。

「すみません、お待たせしました」

スッと襖が開き、松陽が入ってきた。

「あの、銀さん。やつときは子供たちの稽古に付き合って頂き、ありがとうございました。子供たちも喜んでましたよ」

笑顔の松陽。

「や、そんなア。ちょっと見てただけです」

照れているのか、手を頭の後ろにやる。

「やつじえぱ……」

松陽は何か思い出したかのよつて言つた。そしてある物を取り出した。

「あつ」

それは銀時の木刀だった。

「廁に置きっぱなしでしたよ」

「すみません……」

照れ混じりに木刀を受け取る。

「「」の柄の部分の洞爺湖って、どうこうの意味ですか？」

絶対聞くと思った質問。

ああ、その木刀は通販で買つて、柄の部分に文字を入れてくれるつてサービスがあつたから原作者の地元にちなんで洞爺湖を入れたんですよ。別に俺としてはこだわりないんすけどねエ　てへべろ

なんて言えるかアアア！－つーか最後の何？どこがてへべろ！？流行に乗つかるうとしてどうでもいいところで使うなよペテン師イイイ－！

心の中でシャウトする銀時。

…言えない。剣を教えてくれた先生に、こんなこと死んでも言えねエ－！

銀時はゴホンと咳払いした。

「あのですね、この木刀はと、洞爺湖の仙人にもらつ…」

「この木刀、通販で買つてたアルよ。こないだカレー溢して新しいのを注文してたアル！」

言いかけのところで神楽が大力ミングアウト。

「銀さん！？それ修学旅行で買つたとか言つてしませんでした！？いや、でも何本か折れてるし、実際洞爺湖の仙人つて名乗るオッサン

もいたわけだし…」

新ハにいたつては「んがらがつている。

「さやーぐらちゅ わはーんんんーー何で言つかなー?てめつ、約束の三五円はパーだかんなー!」

「だつて本当のことアル。嘘は泥棒の始まりネ!始まつたとこりで痛い目に遭うのは結局自分アル!」

なんか上手いことをいう神楽。

「侍の魂、通販で買うんだ、この人」

「俺アね、真剣は持たない主義でね、血を見ると吐きそうになっちやうから。こないだもね、善意で献血行つたんだけどね、間違えて注射器に溜まつた血を見たら氣絶しちゃってね、もう大変だつたんだよ」

嘘が下手すぎて新ハと神楽は軽蔑の眼差しで銀時を見る。

「本当だかんなー!」

焦り、銀時は冷や汗でびっしょりだった。

松陽は三人のやり取りを声に出して笑っていた。

銀時は驚いた。

松陽はよく笑顔を見せる人だった。だけど、こんなに声を出して笑

つたところなんて、見たことがなかつた。

「本当に、面白いですね。三人は」

「銀ちゃんがバカなだけアル」

「オメーもだろが」

こんなグダグダぶりを正直、先生に見せたくないと思っていたが松陽の笑つた顔を見て、安堵した。

「でも、銀さんは真剣を持たないなんて変わつてますね」

「そ、そつすか？」

今の時代じゃ真剣帯刀してんのは幕府の人間か攘夷浪士ぐらいだしな、と思つた。

そう喋つているうちに、口は暮れかけていた。

松陽の厚意により、泊まることになつた。

布団を敷きながら、まさかまたここで眠れるなんてな、と考えていた。

「先生、なんでコイツらと一緒に部屋なの？」

「チビがいい度胸アル。本当は一緒に寝てほしくせん」

「お前もチビだろ！」

「フン、頭一個分は違うネ」

布団を敷く最中、神楽と子銀時は何やらもめていた。

「ガキはガキなりに可愛い態度取るがいいネ。ほら、神楽お姉ちゃんが一緒に寝てやるネ」

「やめろ！ ガキ扱いすんな……」

「ガキネ！」

神楽は子銀時を追い回していた。

「仲いいですね」

「なんか複雑……」

傍ら、銀時と新八はシーツを敷いていた。

寝巻きは松陽の家にある物を適当に押借した。

「なんか、銀時と一緒にしかやつてすみません。部屋数がないもので…」

松陽が襖から顔を覗かせた。

「いえ、全然大丈夫です。むしろありがとうございますよ」

新八が丁寧に言つ。

「ゆづくつしてこつてくださいね」

ヤツリと襖を閉めた。

「うぬせーなア」

夜中になつても、神楽と子銀時は騒いでいた。枕投げやら何やらでついには新八も巻き沿いに遭い、一緒になつて騒いでいた。

おちおち寝ていられなくなつた銀時は、風にでも当たらうかと部屋を出た。

月が美しく映えていた。

第5話　月は

月明かりが縁側を照らしている。

なんだか懐かしい匂いのする寝巻きの着流し。

銀時は欠伸をしながらシミシミと軋む音を鳴り響かせながら、縁側に出た。

夜空にぽっかり浮いている月をぱーっと見ながら、腰を下ろした。

妙な気持ちにそれはさせてくれた。

時代が移り、色々変わってしまった。

だが、月は変わらずただ地を照らしている。

銀時は見上げたまま、一息ついた。

変わらぬすとある、簡単なことに思えるが難しい。

すると、向こうから人影が現れた。

「眠れないんですか？」

銀時は見上げる。

声の主は松陽だった。

「…アンタこそ、眠れないんですか」

「そんな感じです」

そういふと、松陽は銀時の隣に腰を下ろした。

このままの人といふと、びつかてしまいそうだ。

胸が詰まる。

松陽の笑顔が、苦しくなる。

銀時は部屋に戻るつかと思い、何かしら理由をつけて言おうかと思つたが、松陽の言葉の方が早かつた。

「銀時、今あなたは幸せですか？」

「え……」

耳を疑つた。

さつきまでは”銀さん”と呼んでいたのに、今、松陽は”銀時”と呼んだのだ。

バレていたか…

「…いつから…」

銀時の質問に答えた。

「初めて出合つた時からです」

「そんなに前から…」

松陽はもう一度繰り返した。

「銀時、今あなたは幸せですか？」

胸が張り裂けそうだった。

頭の中が真っ白になる。

「…分かってんなら聞くなつてんだ」

フフッと笑うと松陽は続けた。

「あの二人と一緒にいる銀時を見てると、私もすいへ幸せです」

「…そつかよ」

照れ混じりに言う銀時。

「銀時は何も変わつてませんね。安心しました。ヤンキーになつてないかとか、犯罪人になつてないかとか」

「どんだけ信用ねーの！？」

あ、と銀時は口を抑えた。

「やつぱアンタには敵わねーよ」

「何がですか？」

「色々とだよ！」

銀時は頭を搔いた。

「すっかり私の背丈も越えて。小太郎も晋助も、大きくなつてるんでしううね」

「たつぱだけは立派になつたかな、たつぱだけは。いやでも高杉はチビだな」

松陽は笑った。

「一人にも会つてみたいものです」

銀時はぽそりと「もうだな……」と呟いた。

「銀時」

改めて呼んだ。

その声が、懐かしくて返事ができなかつた。

「銀時、未来の私はあなたたちのそばにいますか？」

思いもよらない言葉で、ますます何も言えなくなる。

「…そばに、いるんじゃねーか?アンタのことだし」

松陽は銀時の頭に手をのせた。

「銀時」

やつ言いながら頭を撫でた。

「うひょ、ガキじゃあるめーし」

嫌がる素振りを見せる。

「フフフ、いくつになつても銀時は私の可愛い教え子ですよ」

「あのなア…」

お人好しにもいといふんだと思う。

「銀時がそれくらいの歳になつたら私はおじいちゃんですかね。どんなおじいちゃんになつてるんでしょう」

「ハゲてるんじゃね」

「それも悪くはないですね」

意外にも反発してこなかつた。

「どんな姿であれ、あなたたちの成長を見守ること」が、私の務めですから」

松陽のわざやかな願いにさえも、途切れてしまつ。

あの頃の自分は何もできなかつた。

でもすべてを知った今は、

今なら、

まだ間に合ひつかもしれない。

松陽を守る」ことができるかもしれない。

「先生はよオ、幸せなのか?」

松陽は田を見開いた。

わざと嬉しかったのだろう。

すぐに頬の筋肉が和らいだ。

「幸せですよ。こんなに思われてるんですから」

「そいつよかつた」

銀時も笑みを浮かべる。

この時間がもつと、永遠に続けばいいのに。

「…これからどんな世の中になつていくんでしょうね。ここはまだ大丈夫ですけど、江戸の方ではもう戦争が何年も前から始まつてい

るんです」

それが後につけられた攘夷戦争。

この頃は攘夷戦争初期から中期の最中である。戦争の規模はどんどん拡大していった。

都会の者は元服すれば徴兵する」とは当たり前だった。

国のために戦うのだ。

「戦争なんか、やる必要ないはずですよ。なんて言つてますけど、誰も私の意見など聞いてくれません。私のやるべきことは、子供たちを護ることですから」

「ちやんと聞いてるぜ」

松陽は銀時を見た。

「アンタが教えてくれたこと、俺たちはちやんと聞いていたぜ。ちゃんと届いてる。今でもずっと」

初めて先生の本音を聞けたような気がして、新鮮だった。

第6話 金持ひ廻神せり

月明かりが一人を一層照らしている。

騒がしかつた部屋も、寝静まつたようだ。

銀時は一息つく。

これから起りる、この時代の自分を背けるかのよつて、松陽の前から立ち去つとした。

嬉しさと悲しきのせめぎあ。

「おやすみなせこ、銀時」

何も言わず立ち去つたある銀時に優しく声をかける。

なんで、そんなに平然としていられるのか？

そんな自分が正当なのかも分からぬ。

無性に腹が立つ。

もし、タイムスリップしたのが俺じゃなくてジラだったら？

高杉だつたら？

お前らは先生に何を言ひつへ

何を聞く？

銀時は静かに寝床の部屋の襖を開けた。

ちょうど月明かりが射し込み、新八たちの顔がうかがえる。

すーすーと寝息をたて、気持ち良さそうに眠っている。

新八と神楽に挟まれてる子銀時も、これから起ることなど知りもせず、涎を滴ながら満足そうに寝ている。

銀時は神楽の横に敷かれた布団に仰向けに寝転んだ。

真つ暗な天井を見つめる。

色々と考えていたが、体は思った以上に疲れており、いつの間にか寝てしまった。

* * * * *

時移つて万事屋玄関。

階段を上る数人の足跡。

「しかし近藤さんも面倒な依頼万事屋に押し付けるなんて無茶ぶりしますね」

「確かに、言ってハイと素直に俺たちの依頼きくようなクチじやねーからな」

「一か八かの頼み事だ。ちゃんとお願ひすれば分かつてくれるはずだ」

その数人とは、真選組の近藤、土方、沖田だった。

階段を上り、玄関口を見るとそこにはかつ… キャプテン・カツーラの変装をした桂だった。横にはお決まりの謎の宇宙生物、エリザベスもいる。

桂もといキャプテン・カツーラは冷静だった。

真選組トリオも黙る。

「なんだチミは」

「なんだチミはってか、そうです私が変なキャプテンです」

「ハア？」

桂は体制を構える。

「あ、変なキャプテンだから変なキャプテン。変なキャプテンだから変なキャプテンと。だつふんだ」

ズテーンと、お決まりの如く乗っかる三人。

「つーかアンタ、万事屋の前で何を?」

「銀時に用があつてな。簡単に言つたらどうすれば宇宙キャプテンになれるかつて相談に来たんだが…どうやら留守のようだ」

桂はこれ以上いるとバレて捕まると思い、三人を通り抜けようとしたが、土方に肩を止められた。

「アンタ、逃げよつてか。俺の日は「まかせね」」

土方の瞳孔が鋭く光る。

「あの、メッシュからサインもらってきてくれませんか」

色紙を出す土方。

「トシ一へ。宇宙キャラプロンとメッシュショットなんも接点ないけどー。」

「キャプテンつたら近藤さん、アレしかねーだろ、キャプ翼しかねーだろ。兄弟でサッカーチーム作っちゃうアレ的な」

「いやねーよー！ つか意味分かんないー！ 俺とお前の関係が？」

桂はこの隙を狙つて逃げようとしたが近藤が立ちはだかつた。

「俺をリーガーにしてくださいーー！」

「いやアンタも意味分かんねーよ」

「二人とも何やつてんですかイ。キャブ翼のことはおいといひとつ
とと中に入りやしょ」

ガララッと沖田は万事屋の玄関を開けた。

「あり、開いてますぜ。無用心にも程があらア」

と言いつつ、中に入る沖田。

「貴様、何勝手に銀時の家に上がつてい。ここは俺の家でもある、
マイスイートホームだ」

「お前のスイートホームは刑務所だ。午前10時2分、指名手配攘
夷浪士の疑いで逮捕」

呆気なく土方にこの場で現行犯逮捕される桂。

「フツ、さすが真選組の要とも言われるだけあるな」

手錠をかけられ、ひしひしと悔いを表す桂。

「つーか総悟、お前も不法侵入でブタ箱に入れられてーのか」

「大丈夫でさア。家宅捜索願をちゃんともらつてるんで。ホラ近藤
さんのサインも」

汚い字で”家宅捜索願”と書かれた白い紙にひびきつけて細工したのが、近藤の判子が押されていた。

「…近藤さん、いいのか？」

「け、警察だからいいんじゃねー?トシ、俺たちも入るぞ」

「ブハハ!俺は今警察の不正をこの目にしたぞーー!」

「お前は黙つとけー!」

桂を強引に引っ張る。逃げられでは困るので、仕方なく桂も万事屋に入ることにした。

「やつぱりいませんねイ

「オイ、コレ見ろ」

土方はあるものに気がついた。

それは、新ハガ持つててきたタイム[電子レンジ]だつた。

「間違いねエ。三人はレンジで卵を温めるとこ「危険な」とをやつ

たに違ひねエ。そんで、三人は…

泣く素振りを見せるが口は笑っていた。

「総悟？何笑つてんだ」

「いや…」

ふふふと笑っている沖田。

「おかしいな、出掛けた形跡は何もないぞ。財布はあるし、布団が敷かれたままだし、朝飯にでも食べよつとしたのか、ご飯も炊いてある」

「悪趣味なスクーターもあつたしな

近藤は腕組みをした。

「まるで神隠しにでもあつたみたいだ

「しかし」のレンジが気になるな

「あつこり、桂勝手に動くな」

桂は机に置かれたタイム電子レンジに興味を示す。

そのタイム電子レンジは、ふたが閉まっていた。

コンセントの類いもついていないことに気づく。といふか万事屋三人は気づかなかつた。

スタートボタンはないが、メモリを設定するような回しだけが設置されている。

沖田は回し始めた。

「きっと、奴らがこのレンジを調べている最中に何かしらあつたんだ

「何かしらってなんですかイ」

土方はタバコに火をつけた。

「あんまいじくらね一方がいいんじゃねーか?」

だが沖田は土方の言つことなんて聞くはずもない。

そのままふたを開けた。

開けてしまった。

辺り一面草原。

タイム電子レンジと、近藤、土方、沖田、桂だけがそこにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199ba/>

my way

2012年1月14日20時48分発行